様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月 ３１ 日現在

機関番号：１３７０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３８１１９２

研究課題名（和文）プレゼンテーションを通した論理的文章表現の学習指導に関する基礎的研究

研究課題名（英文）The dialogically construction of students' writing and strategies of voicing in presentation activities

研究代表者
小林　一貴（Kobayashi, Kazutaka）

岐阜大学・教育学部・准教授

研究者番号：３０３４５７７２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、発表活動を通した書く過程を調査・分析し、特に書くことにおける複数のテクストの相互関係を学習者が意識化して学習内容として習得する過程の一端を明らかにした。
図や写真、新聞記事を用いた授業を行い、文章と発表の談話を記録し文字化した。対話理論ならびに間テクスト性に基づく分析により、発表活動が書くことにおける複数の声の境界の自覚化につながっていることを明らかにした。また、引用される複数の声の文脈が話題とされることによりジャンルの意識化が表現活動において生じることを明らかにした。書くことの学習指導では、書き手が叙述するために必要とされる情報の文脈を話題とした問いかけが重要であることを指摘した。

研究成果の概要（英文）：This study considers the development of voicing strategy in argumentative writing, and analyzes a representative activity, student ’s compositions and group discussions which were extracted from the writing class. To analyze writings in this approach, three classes were selected. The analysis of these compositions and presentations reveals that the first writing shared the topic and argument space with the article based on dialogic processes, whereas the second writing was based on direct interaction with a dispersed context and the topic was relativized. Presentative activities cause recognition of dialogic process in learning writing. The analysis reveals that student recognized the order of voicing and develops the strategies of voicing in writing, through discussions include the topics and questions referring context of voices in course material texts. It is important to construct dialogic interactions with contexts in mediated writing.

研究分野：国語科教育学

キーワード：書くことの教育　文章表現　ジャンル　対話　ライティング　ディスコース　リテラシー　プレゼンテーション

１．研究開始当初の背景

社会への適切な参加を目的とするリテラシーの育成が課題となる中、社会生活と密接に結びついた「論理や思考」に基づく書くことの学習指導が求められてきている。特に、様々な言語活動を通して、話すこととの関連から書くことの能力のとらえ直しを行い、それをふまえた授業改善の取り組みが行われてきている。

しかし、そうした取り組みがなされつつも、社会生活と密接に結びついた書くことの能力の把握や再定義が十分になされているとは言い難い。リテラシー能力の実質をとらえる際にも、従来からのジャンルの類型と脱文脈化された文章に関する知識が参照され、それらの強化が学習の前提となっている場合が多い。あるいは、交流活動を通して学習者相互の見方や考え方の違いを確認し、「賛成か反対か」といった二者択一や、「…もあれば、…もある」といった俯瞰的に考えを整理する等、教室の課題に沿った活動に基づく能力の育成が行われている。この場合、学習活動は教室内の参加者間の相互行為にとどまり、社会文化的な書く能力に基づいた学習指導には至っていない。社会生活におけるリテラシーの育成を目的とし、現実の事柄を授業で取り扱いつつも、社会の一員として当該の問題に対する書くことの当事者、いわゆる「作者性(authorship)」において自身の考えや論理的に表現する学習は実現が難しい状況にある。この書き手の「作者性」をいかに指導において保証するか、そのための学習指導のデザインと具体的な学習活動をいかに進めるべきかが課題となる。

また、研究方法についても課題が認められる。社会的文脈と結びついたリテラシー研究は、主としてテクスト／ディスコース研究を理論的基盤として進められてきている。しかし、日本においては伝達を基本としたコミュニケーションモデルや、書き手の内的な文章表現過程を取り扱った認知モデルが中心であり、社会的文脈としてのリテラシー能力を検討するための理論的素地が十分とは言えない状況にある。また、テクスト／ディスコース研究の応用においても、慣習・規範としての側面に重点が置かれる傾向が見られる。リテラシー能力の基盤となるテクスト／ディスコース理論を方法として採用しつつ、それを学習者にとっての学習内容として位置づけていくための研究が必要な状況にある。

２．研究の目的

目的は次の２つである。

(1)口頭発表の機会を通して、学習者は書くことについてどのような知識を構築するのかを明らかにする。

(2)書くことについての知識の構築過程に関する研究方法について整理、検討する。

第１の目的は、主として書くことの学習指導に関するものである。社会的文脈との関連から書く能力を捉え、それに基づく学習指導の原理的な整理・検討を行うものである。そのために、ひとまとまりの考えを話すプレゼンテーションと書くことを相互に関連づけた学習指導の調査・分析を行う。そして、学習者にとっての書くことの知識とはどのようなものか、それが習得されるプロセスは学習指導レベルでどのような手続きにおいて実現されるかを考察する。

テクスト／ディスコース研究に基づく書くことの教育研究の中でも特に対話プロセスに焦点化した理論では、書くことには様々な現象や出来事とそれに言及する複数の異なった文脈を持つ言説が関わってくるとしている。そのため、「論理や思考」を指導で扱うような場合には、いくつもの事実と解釈に向き合いながら複雑な言説をまとめていくことが必要となる。そのための言語活動として、これまでにも交流を通した学習活動が行われてきており、そうした活動において学習者がどのように書くことについての認識を拡充しているかという視点から学習指導をとらえ直し、学習指導の手がかりを見出すことをねらいとする。これは本研究の中心となる目的である。

第２の目的は、書くことの学習指導の研究方法に関するものである。テクスト／ディスコース理論を基盤とする書くことの教育研究では、書くことは社会文化的なコンテクストと不可分であり、書くことの学習としての一定のコンテクストへの適応プロセスを具体的に明らかにしてきた。また、その中でも対話理論や間テクスト性をふまえた議論では、複数の役割や言葉（声）の相互作用過程として書くことの学習をとらえる見方を示してきている。この見方では、書くことの学習とは単なるコンテクストへの適応ではない。先に触れた対話理論を基盤として、書く活動とそれに対応するコンテクストという関係は一度解消され、社会文化的コンテクストにおける重層的な相互作用のプロセスとして書くことの学習をとらえてきている。こうした見方から、欧米では既に社会活動と密接に結びついた学習者にとっての書く知識の構築から書くことの学習指導ならびにカリキュラムが作られてきている。こうした成果をふまえつつ、本研究ではディスコース研究の一つであるナラティヴ研究をふまえながら、〈今‐ここ〉における表現の実践と〈あの時‐あそこ〉という異なった時空間の言葉を相互作用という見方を導入する。この見方では、一定のコンテクストにとどまらず、複数の異なった次元のコンテクストの関連を視野に入れて書くことの活動をとらえ直す必要が生じる。こうしたコンテクストの複数性を前提とした書くことの学習過程の原理を提示することが研究方法に関する目的となる。

３．研究の方法

次のような手続き、方法をとった。
(1)小・中学校、高等学校の教員との連携のもとに授業を計画し、授業を行う。機器を用いて授業ならびに学習活動の記録をとり、トランスクリプトを作成し、研究のためのデータを得る。
(2)ディスコース研究に基づくライティングの研究の方法に基づき、学習過程の分析を行う。
(3)分析の考察を行い、研究の目的学習者にとって書くことについての知識が構築されるような学習活動の要因を明らかにする。

(1)については、3つの授業を計画、実践した。
第1の授業は小学校の6年生のクラスで行った。この授業では、同一の出来事を扱った異なる新聞記事を読んで紹介、発表をし合い、質疑を通して、記事の違いをふまえながら意見文を書く学習を行った。同一のトピックによる複数の記事のテクストに関わり、交流における声への言及と連続性を持たせながら、書くことを対話的に構築していくという学習である。
第2の授業では、小学校4年生の「リーフレットづくり」という書くことの学習を行った。写真や図における情報伝達の違いを批判的に検討し、それをふまえた上で言語による表現活動の方法を検討し、実際に表現活動を行うという学習である。写真や図との対比をふまえながら文章構成を意識した書くことによる表現方法を学ぶことも基本的にねらいとしている。
授業ではプロジェクターを用いた発表と学習者同士の交流を行った。学習者が実際に言葉にして表現することを通して、写真等の情報の具体性と自らの言語表現を意識化して用いることをねらいとした活動である。記述、分析、考察については第1の授業と同様の手続きをとった。
第3の授業は、中学校3年生のクラスで行った。研修旅行についての報告会を行う授業であり、グループ交流を通して見学や体験内容についてプレゼンテーションのスライドと発表原稿を作成する学習である。
これらの授業で行った学習活動を共通して特徴づけるのは、グループでの交流活動におけるコーチングである。書き方や内容についての助言を与えるのではなく、書き手が書きたいことを引き出すコーチングの方法をふまえた質疑を取り入れ、書き手が質問に対して自らの考えを語る過程で複数のテクストとの相互関連を意識できる機会を設定した。
そうした指導のプロセスで重視されるのは、書き手の「話す／語る」ことである。当該分野のエキスパートや関係者に対して自らの論を語ること、あるいは不特定の相手に対して伝えること等、いわゆる「プレゼンテーション」が書き手の「作者性」を高めることが指摘されている。これは、〈今、ここ〉において「話す／語る」ことが聞き手との相互作用によって構築され、相対的に「書くこと」の自覚につながるとされるからである。
これらの授業について、ビデオカメラとICレコーダーで学習活動を記録した。記録した授業の調査ならびに映像・音声データ、書かれた資料（学習者の書いた文章、リフレクションペーパー等）を文字に起こす。複数の研究補助員によりトランスクライブの作業を行った。

(2)・(3)について
(1)の授業の記録に基づいて、学習者の書いた文章とグループ交流の談話に基づいて作成したトランスクリプトを分析した。文章はグループ交流の前と後で 2 回書いており、書かれた文章の変容の要因について交流の談話の分析をふまえた考察を行った。その際、書くことと交流活動との単なる因果関係を問題にするのではなく、繰り返され再構成される声を中心に分析することにより、書くことの学習の対話的構築の実現につながる要因を考えるという分析、手続きを基本的にとった。
分析の手続きと方法は①～③の通りである。

①プレゼンテーションと、それを通して書かれた（書きかえられた）テクストとの相互関係
・プレゼンテーションの様子の記録（ビデオ、音声）を文字化したものと、プレゼンテーションの前後で書かれた文章を比較・分析する。
・分析の方法としては、主として「引用」、「話法（直接話法、間接話法　等)」、「中心語彙」に基づく分析を行った。
・「引用」ならびに「話法」の分析は、「対話」の理論に基づくテクスト分析の基本的な方法である。複数の文脈を持つ言説の「専有(appropriation)」のプロセスの変化を比較、分析した。

②書き手による自らの書く行為や表現上の具体的な変化に対する意味付け
・書き手による自身の表現行為に対するリフレクションの分析を行う。「書くこと」と「話す／語る」ことという表現活動を通して、学習者が自らのプレゼンテーションという表現行為をどのように受けとめているかについて、学習の過程ならびに終了後に記述したものを分析した。
・学習者のリフレクションの記述については、「エピソード分析」の方法を援用し、プレゼンテーションにおいて具体的に考えたこと、感じたことの語りの様相を質的に分析した。
さらに、「書くこと」「話す／語る」ことは「対話」的な連鎖の中において生じるため、リフレクションにおける表現行為（ここではプレゼンテーション）そのものについての語りが、次に続く「書くこと」をどのように枠

づけしていくかを分析、考察した。

③当該のトピックに関連する言説の対話的な構築の変化に対する書き手の認識
・書きかえたテクストについてのリフレクションの分析、ならびにテクストの相互関連の分析を行った。(1)、(2)の分析で得た資料をもとに、プレゼンテーション（表現行為）についてのリフレクションと、プレゼンテーションの後に書いたテクストとの関連を考察した。
　以上の分析を通して、テクストの相互関連を基盤とした交流活動の談話において　書くことについてメタ的に意識化された事柄と意見文の変容を記述し、学習の過程を分析、考察した。記述に際しては、先行研究ならびにナラティヴ研究に基づいて引用（投射）の指標を用いた。分析、考察に際しては、以上の方法により学習者が自ら言及した声へのメタの把握と書くことの対話的構築を行う要因を中心に進めた。

４．研究成果
　プレゼンテーションならびに発表の活動と書くことの学習としての表現過程の意識化との関連について、実践的、理論的に整理検討し、以下のような点を明らかにした。
　プレゼンテーションは、〈今、ここ〉における聞き手の反応との相互作用において構築される。この〈今、ここ〉の表現活動の体験が、現前の相互作用にとどまらないさまざまな文脈を持つ言葉との相互作用において構築される。このような表現活動の構築のプロセスの意識化が、学習指導におけるプレゼンテーションならびに発表活動の重要なはたらきとなる。さらに、この意識化が、発表活動と関連した「書くこと」における対話的過程の意識化に連関していることが明らかとなった。それらを、次の(1)(2)に整理する。

(1)書くことについての意識化を生じさせる要因。
(2)(1)の要因が生じるような学習活動の特徴。

　(1)について、発表の活動に基づく交流では、題材に関連する声の文脈が話題となることにより、〈あの時・あそこ（その時・そこ）〉の声の成り立ちが検討され、それが要因となって〈今・ここ〉の書くことにおける声の言及の仕方、声の相互関係に関するメタの把握を促していることが明らかになった。授業で行った意見や報告のジャンルの学習においては、書き手の自分語りから脱して、関連する声と文脈をふまえた書くことへの変容が認められた。
　例えば、第 2 の授業における発表を中心とした交流活動は、校内で引き継ぐ仕事を報告し説明するリーフレットの書式だけではなく、これまで関わってきた作業内容の経験と作業を行ってきた学校生活の全体との関連からの説明という方法が新たに生じていた。このような「分散的」な経験やエピソードの交流を通した学習材化のプロセスの重要性を確認することができた。
　また、第 3 のプレゼンテーションソフトを用いた授業では、作成するプレゼンのモデルの理解する活動においても、プレゼン活動としての相互作用に加え、プレゼン資料に媒介される声とその文脈が意識化されることが認められた。タイトルと写真と説明というシンプルなスライドの構成において、一定の時間的な流れやそこに盛り込まれる語り手の行動や視点、さらに比喩や情景描写などの表現技法に関しても、単に技法を用いることにとどまらずプレゼンの場と経験との相互関係によって複合的なテクストの構築においてそのはたらきをふまえた学習が行われた。また、実際のプレゼン発表においても、発表内容と発表の状況との相互の関わりをふまえ、その関係に発表者自身を位置づけつつ発表がなされていた。定式化されたプレゼン作成の手順や技術、発表する際の話し方に先立って、プレゼンの内容自体がさまざまな視点の情報から複合的に構成されていること、そしてそれはプレゼンの場において具現されること、それらに関わる要因の相互作用によって構築されていることが単元の学習の検討を通して確認された。
　(2)については、学習指導の立場からは、〈あの時・あそこ（その時・そこ）〉の声を〈今・ここ〉で書く、話すことを通して、先行するテクストの声を自ずと引用して、その相互関係が話題とされ個々の声のコンテクストが問題となるような活動の重要性を指摘することができた。具体的には、新聞記事を用いた授業では先行するテクストを要約し意見文を書くこと、そしてそれを口頭で発表するといったテクストの具体的な声を学習者が再構成して表現する過程を明らかにすることができた。また、学習指導の方法について、交流において先行するテクストの具体的な声を問題とするような問いかけや話題の共有が行われることが重要であることが明らかとなった。いつ、誰が、どんな状況や立場で発した声なのかが問題になるような話題と問いかけである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１１件）
①<u>小林一貴</u>、学習材化における書き手の創造性の検討、月刊国語教育研究、査読有、No.539、2017、28-31
②<u>小林一貴</u>・多和田仁、言語的テクストと図表との相互関係に基づく書くことの学習の展開、岐阜大学教育学部研究報告（教育実践研究）、査読無、第 19 巻、2017、11-20

③小林一貴、書くことの学習の対話的構築と声の方略、国語科教育、査読有、第 80 集、2016、47-54
④小林一貴、文章表現の学習におけるまとまりの構築と声の相互反映、国語科教育研究第 130 回全国大学国語教育学会発表要旨集、査読無、2016、169-172
⑤小林一貴・丹下侑輝、テクストの対話的構築に基づくプレゼンテーションの授業、岐阜大学教育学部研究報告（教育実践研究）、査読無、第 18 巻、2016、11-22
⑥小林一貴・森孝太、文章展開と交流活動の相互関係に基づく書くことの学習指導―リーフレット作りの単元の検討を通して、岐阜大学教育学部研究報告（教育実践研究）、査読無、第 18 巻、2016、1-10
⑦小林一貴、グループ活動を通した書くことの学習における共存と論争 ―語りの「反復」に着目して― 、Groupe Bricolage 紀要、査読無、第 33 号，2015、（左）22-33，
⑧小林一貴、書くことの学習におけるテクストの精緻化と相互関係性の分析、岐阜大学教育学部研究報告（人文科学）、査読無、第 64 巻 1 号、2015、11-21
⑨小林一貴・野口正史、声の再構成を通した書くことの学習、岐阜大学教育学部研究報告（教育実践研究）、査読無、第 17 巻、20151-10
⑩小林一貴、書くことの学習過程と声の方略パターン、岐阜大学教育学部研究報告（人文科学）、査読無、第 63 巻 2 号、2015、21-31
⑪小林一貴、書くことの学習におけるトピックの共有とジャンルの対話的構築、国語科教育研究　第 127 回全国大学国語教育学会発表要旨集、査読無、2014、305-308

〔学会発表〕（計３件）
①小林一貴、書くことの対話的構築と声の方略の学習、人文科教育学会、2016 年 9 月 10 日、筑波大学
②小林一貴、文章表現の学習におけるまとまりの構築と声の相互反映、全国大学国語教育学会、2016 年 5 月 28 日、新潟大学
③小林一貴、書くことの学習におけるトピックの共有とジャンルの対話的構築、全国大学国語教育学会、2014 年 11 月 9 日、筑波大学

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
小林　一貴（KOBAYASHI KAZUTAKA）
岐阜大学・教育学部・准教授
研究者番号：30345772

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）